

氏は、悩みつつも、伝統闘牛の勢子となって、新潟県中越地震を経験した小千谷市のフィールドに戻ることで、住民と同じ目線で世界を見ることにした。このような被災者からの目線というのは、本書で山本氏もたびたび触れており、全体を通してそこに寄り添う立場を示しているが、第8章のpp. 208-210では「役割交代——受援力を超えて」として、被災者のほうも役割を変える必要があること、つまり被災者自身も変わるべきことを指摘しており、研究者として住民を見た目線に他ならない。被災者を思い、胸が張り裂けるような思いをするのは皆同じとして、そのとき地域研究に実践的な意味を持たせて、それを行動に移せるというのは、誰にでもできるとは限らないし、それが唯一の答えとは限らないのではないか。しかし、それでは、自分は何ができるだろうか。地域研究者として災害への在り方について、良い意味で考えさせられることとなった。

「災害対応の地域研究」叢書シリーズは全5巻であり、2016年3月に刊行が完了しており、シリーズ全体でも様々な視点について学び、様々な立場から考えられるようになっている。図表が多く用いられ、現地の写真もたくさんあり、理解しやすいように工夫されている。装丁にも工夫があり、全ページに、欄外に小さな写真があるのも好感がもてるほか、全5巻をそろえるとSTORYの重要さ、つまり本書でも繰り返し示された物語の重要さというメッセージが現れるようになっている。災害と復興について理解を深めるため、被災地について学ぶため、地域研究者として災害・復興に役立とうとするため、あるいは地域研究のあり方やその未来について考えるため、本書およびこのシリーズはとても有益なものである。このような関心をもつ方々に、広く読まれることが望まれる。

(古澤拓郎・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

参考文献

菅 豊. 2013. 『「新しい野の学問」の時代へ——知識生産と社会実践をつなぐために』東京：岩波書店.

西 芳実. 『災害復興で内戦を乗り越える——スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』災害対応の地域研究 2. 京都大学学術出版会, 2014, x+328p.

大きな自然災害は、人々の日常生活を中断させ、生存者に当該社会のあり方を再考させる。復興活動はそのため社会秩序の再建を伴う。近年の自然災害は、メディアで広くニュースが伝わり、外部世界から支援団体が多数参入し、復興活動を進展させる。2004年12月26日のスマトラ島沖地震・津波は、それを如実に語る。本書は、地震前からアチェが抱えていた社会的課題に着目しつつ、地震とその後の復興に向けての9年間の人々の歩みを綴る。

天然ガスなど豊かな資源を有するアチェでは、利益配分をめぐりインドネシア中央政府と確執が生じ、1976年より独立を唱える自由アチェ運動が展開していた。とりわけスハルト体制が崩壊した1998年以降、自由アチェ運動は活性化した。インドネシア政府は2003年アチェに非常事態を宣言し、独立派ゲリラ掃討のための軍事作戦を展開した。外部からの報道者や人道関係の支援者のアチェ入域は、厳しく制限された。こうした状況下、スマトラ島沖地震・津波がアチェを襲った。津波は、海岸部付近のコミュニティを破壊し、17万3千人の人々の命を奪った。生き残った人々は、自らの生存の意義をかみしめつつ、災害復興に取り組むこととなった。

本書は3部(9章)から構成される。第一部「紛争下の被災——津波が解く『囲い込み』」では、①アチェでは1907年に地震・津波に襲われながら、アチェの沿岸部の人々は津波の危険性について知らなかったのか、②2004年の地震・津波後の国際的な支援活動に対し、インドネシア国軍はなぜ、外国による支援活動を妨害しようとしたのか、③日本もそうした支援活動の一翼を担ったが、日本のNGOの緊急・復興支援はアチェにとって本当に意味があったのか、の3つの議論が展開される。

アチェは過去に津波を伴う地震を経験していたにもかかわらず、その経験は現在の人々に伝えら

れていなかった。なぜか、本書はそこには立ち入っていない。西海岸沖のシムル島ではそれが伝えられていたが、アチェの人々のなかには、地震後に海の水が引いて海岸に取り残された魚を捕りに行き、津波にのまれた人がいたことが指摘される。

またインドネシア国軍は、外部からの支援者が自由アチェ派と結びつくことを警戒していた。インドネシアだけでは復興支援を担いきれないため、外部世界からの支援を受け入れ、国軍はその活動や資金を独占的に管理しようとした。しかし、国際 NGO が大挙して訪れ、インドネシア政府が 2005 年に設置したアチェ・ニース復興再建庁が国内外の支援団体の連絡調整役となると、国軍は役割を後退させられたことが論じられる。また比較的規模の小さい日本の NGO の緊急・復興支援団体は、国軍との対決を避け、許可された範囲内で当初活動した。ただし、一旦活動を始めるとそこが人々の集う拠点となり、国軍が立ち入りを禁止した内陸地域からも人々が集まり始めた。ついに国軍は立ち入り禁止を解除せざるを得なかった。

こうして国内外の支援団体が活動するなかで、アチェ人がポスコ (posko: pos kordinasi の略称) という連絡詰所を設けて対応した興味深い事例が提示される。ポスコは、行政組織の一部として機能することもあれば、避難所の住民が自主的に設けたものも存在した。ポスコをとおして、地元の人々が外部の支援団体に囲い込まれることを避け、両者の協働により復興が始まったことを論じる。

第二部「復興再建期——世界と再び繋がるアチェ」では、①被災者たちが外国からの支援者を楽しそうに迎えていたのはなぜか、②津波の犠牲者はどのように埋葬され、どのように弔われたのか、③支援団体が建てた復興住宅に空き家が多く見られたのはなぜか、の 3 点が論じられる。

「津波で何もかも失ったのに、アチェの人たちはなぜみんな笑顔なんですか」と、著者はしばしば報道や人道支援に従事した人たちから尋ねられたという。この問いは、本書を貫くテーマでもある。著者は、被災を契機にアチェが長らく直面していた孤立から解放され、多くの人々が出入りする社会になったことに、その答えを見出す。これは、

津波後のアチェ人の弔い方とも関係する。津波前の紛争下のアチェでは、行方不明者のものと思われる人骨が多数発見されても、人の死についておっぴらに語ることが憚られた。他方津波により多くの人命が失われ、一人一人の身元を確認できずに埋葬せざるを得なかったが、その死を社会で悼むことができるようになったことを著者は重視する。2009 年にオープンしたバンダアチェの津波博物館には、海の底を表したアッラーのもとに召された「昇天の間」が設けられた。アチェを訪れる観光客が、必ず立ち寄る場になったことが述べられる。

生き残った人々の新たなコミュニティ作りも始まった。支援団体は、12 万戸の住宅を用意した。しかし、復興住宅にははじめのうち、多くの空き家が見られた。再建された住宅に入居できるのは、権利者かその親族でなければならないとする支援団体の決まりを、住民が忠実に守ったためであった。その後支援団体が去り、住宅の譲渡や転用が可能になると、住民が入れ替わりながら復興住宅が活用されたことが明らかにされる。

第三部「社会の復興——災害で生まれる新しい社会」では、①インドネシアの他の地域の人々はアチェの被災をどのように受け止めたのか、②外国にいる私たちはアチェの経験をどのように知ることができるのか、③津波と復興を経てアチェの人々や社会はどのように変わったのか、を検討する。

スマトラ島沖地震・津波は、防災や緊急人道支援、被災地の復興が、国際社会の焦点課題になることを、他地域のインドネシア人にも認識させた。当初はスマトラ島沖地震・津波がアチェ人への天罰とみなしたインドネシア他地域の人々の間でも、遺体の収容や人道支援のため多数がアチェを訪れ、ボランティア (「レラワン」) として活動したことが論じられる。その後も 2006 年にジャワ地震、2009 年に西ジャワ地震と西スマトラ地震が起こるなかで、地震は人知を超えたものであり、災害は誰の身にも起こりうるとする出版物がインドネシアで増えたことを述べる。災害は被災者を選ばないため、誰もが災害に備えねばならないこと、災害後の対応の重要性和日頃から他地域の人々と良

好な関係を結ぶことの必要性を、インドネシア人が認識したことを明らかにする。

また復興再建庁が2009年に解散し、外部からの人道支援団体も撤退する一方で、かつて「メッカのベランダ」と呼ばれたアチェが、防災学の拠点となろうとしていることが論じられる。被災を契機として、アチェが抱えてきた課題を克服して新しい価値を創出し、世界に向けて発信しようとするアチェ人の姿を描く。デジタル化とデータベース化により、アチェに行かなくてもアチェの様子がある程度わかる仕組みが作られていることが述べられる。また津波と復興を経て、人道支援がアチェに持ち込んだ新しい考え方に馴染んだ津波後世代が登場していることを明らかにする。アチェでは、旧自由アチェ派が選挙で政治の表舞台に登場してイスラム信仰が強まるとともに、新たな世代の間で公平性や透明性が重視され出したことを指摘する。アチェ人が被災しながらも思いのほか明るかったのは、被災を契機に新しい関係を切り開くことに強い期待を寄せており、また支援のために現地入りした人々の活動が、アチェの人々の期待に応えつつあったことを理由とする。

本書は地域研究の視点から、アチェの抱えていた社会的課題に着目しつつ、地震・津波後いかに復興活動が進展したかを描く。被災が大きく報道されたことにより、外部世界の多くの支援団体がアチェに入域した。その結果内戦が終結し、外部の支援団体とアチェ人やインドネシア人の協働により復興への歩みが始まり、独立か統合かという二者択一的発想が後退したことが論じられる。外部支援団体の活動や被災者の動向さらにその後のアチェの復興過程を、政治的動向も踏まえ、丹念に明らかにする。すぐれた復興のドラマ作品とすら感じさせる。

著者は津波後、紛争によるアチェ社会内部の亀裂、外部世界との断絶、インドネシア他地域との亀裂が、修復されたことを説く。復興は被災前より良い状態を目指すものでなければならぬが、そのためにアチェと国民統合の関係や情報の扱いについてさらに検討する必要があるように思われる。

2004年の地震・津波は、国際社会の強い関心を

呼び、内戦は終息し、被災者への復興活動が集中的に展開した。外部世界に対応したインドネシア側の動向は、重要となる。外部の支援団体は、彼らと対応しきれない国軍ではなく、復興再建庁を窓口とした。インドネシアでは、復興再建庁で示されたような情報を集約して対応できる行政官が、そのプレゼンスを高めようとしている。自治権を強めたアチェにおける旧自由アチェ派の政治家と行政官の対立は、これを示唆する。自然災害は国家と関係なく発生し、国境を越えて被害をもたらすが、国民国家の枠組みを再認識させることもしばしばである。本書では、津波により逃げ惑う人々の姿や身元不明の並べられた死体が、繰り返しインドネシア国内のテレビで放映され、インドネシアの多くの人々が同胞の悲劇と捉え、遺体埋葬のためボランティアとしてアチェに入域したことが述べられている。インドネシアの国民統合が、再確認されたといえよう。こうしたなかで、アチェのワリ・ナングロ（アチェの主権継承者）と州旗をめぐる問題は、今後さらに大きな論点となるように思われる。

またこれまでの自然災害では、情報がしばしば囲い込まれた。情報の偏りは、その後の防災対策に大きな影響を与える。上述のように、1907年にもアチェで地震・津波が起きた。当時はアチェ戦争（1873～1912）の最中であり、オランダ軍の特殊部隊が内陸部のアチェの抵抗軍を掃討中であった。内戦状態にあった点は、2004年と状況が類似する。1907年の津波について、古老の間で「もしイスラムを知る者がいないがしろにされ、聖人が辱められるようなことがあれば、海の水が陸に上がるという形でアッラーが罰を与える」と語られたことが、本書で示されている。当時津波に襲われた沿岸部は、既にオランダの影響下にあった。1907年の津波はアチェ人に、「異教徒」オランダと「敬虔なムスリム」アチェ人の対立図式を強化させたことがわかる。ただし天罰と了解すると、防災につながりにくい。アチェ戦争と距離をおいていたシムル島では、津波からの避難を歌うスモンが作り上げられ、今回の津波で犠牲者がほとんど出なかった。他方アチェでは大惨事となった。情報の伝達とともに解釈において、囲い込まない

ことの重要性に改めて気づかされる。

アチェの社会復興は終息したわけではない。人々が解消したい苦悩や思いを混在させていることが、本書からうかがえる。若い世代の重視する「透明性」や「公平性」の価値観は、イスラムとどう関係づけられるのか、づけられないのか。また支援で交流した非イスラム世界をも含めた関係を、人々の世界観のなかにいかに繰り込んでいくのか。それにそもそも、ともにアッラーを信じていたのに、一方は津波でアッラーのもとに召され、他方は生き残ったことの意義をどう理解し、防災への努力と結び付けていけばいいのか。また防災の必要性を認識しつつも、2012年に起きたアチェでの地震は、科学知識を有した人々を恐怖と不安におとし入れ、適切な避難行動から逸脱させた。なぜか。これらはいずれも、地域研究ならびに人文社会科学研究上の重要な論点となる。アチェの社会秩序の再建は、これからが正念場を迎えることになるだろう。

(弘末雅士・立教大学文学部)

牧 紀男；山本博之（編著）『国際協力と
防災——つくる・よりそう・きたえる』災害
対応の地域研究 3. 京都大学学術出版会、
2015, xvi+262p.

本書の基本的課題は、アジアの災害に対する回復力（レジリエンス）の強さを最大限に活かした「アジアの防災モデル」の構築を試みることである。評者にとり、本書の最も重要な視座と思えるのは、災害（自然災害のみでなく、紛争などの人為災害も含む）は社会に深刻な亀裂をもたらすという指摘であり、その亀裂の修復はいかにして可能なのかという問いである。そもそも近代という時代は、人々の間にさまざまな差異、対立、分断を生み出してきた。それに対し、社会、あるいは「社会的なもの（the social）」は、人々の間の統合と連帯を可能とする思想と制度として機能してきた。しかし、今日の災害は、新たなリスクとして社会に亀裂を生み、その修復の方法に関してはいかなる専門家であっても「正しい」処方箋を出すことが不可能な状況に私たちは生きている。そのような

混迷と不確実性の浸透する今日の世界において、災害によってもたらされた亀裂の修復に対し、「よそもの」が果たす役割を考察するのが本書の目的である。「よそもの」とは、「他の地域あるいは社会から来た人のことだが、当事者意識を持たずに無責任な関わり方をする人という意味ではなく、同時代に生きる者として当事者意識を持つ存在である。しかも、被災地の外に生活や活動の基盤があることから、支援活動に関わりやすく、被災地にはない物資や情報を提供できることに加え、地元のしがらみや利害関係がないために新たな考え方や方法をもたらしうる存在である」（p. 242）。今日、災害の影響は国家の領域を超える広範な地域に及び、国民国家の枠組みをこえた「よそもの」の関与と連帯を可能にする枠組みの構築が急がれる。本書はそのような喫緊の課題に正面から取り組んでいる。

まず、本書の各章を概観してみよう。序章（牧紀男）では、本書が、いわゆる「世界標準防災モデル」が世界のどこでも適用可能という前提には立たないことが指摘される。日本は、「世界標準防災モデル」の完備によって災害に対する抵抗力を高めてきたが、その一方で失ったのは災害について自分で考え、備える能力としての回復力ではないかと問う。対照的に、東南アジアの途上国の人々は、被害は発生するものという前提で、したたかかつしなやかに対応する回復力の強さを持つ。このような回復力の強さを最大限に活かした「アジアの防災モデル」を構想することが本書の目的であると述べられる。

以下、本書は3部によって構成される。第一部「地域の抵抗力をつくる」では、2011年タイの大洪水災害（第1章）と2013年のフィリピン中部を襲った台風被害（第2章）を事例とし、自然災害と地域社会の関わりが論じられる。第二部「回復力によりそう」では、カンボジアの紛争（第3章）と2002年に独立した東ティモール（第4章）の事例から、紛争という人為災害とそこからの復興において、「よそもの」はどのように関われるのかが論じられる。第三部「支援力をきたえる」は、長年にわたりインドネシアの住宅政策への技術協力に関わってきた専門家（第5章）と、企業による